

「終わりに」

ペトロの手紙一 3章8～12節

学務部特命部長 寺嶋 健一

本日、奨励させていただける機会がいただけたことを大変嬉しく思っております。聖学院大学の全学礼拝では、今までに何度も奨励をさせていただきました。しかし、今回はこれまでの思いとは特に違うのであります。私は 1989 年 3 月から聖学院大学で勤務させていただいております。それは、まだ誕生したばかりで 1 学科のみ、それも 1 年生しかいない聖学院大学でした。それから時間は流れ、来年で勤続 33 年となります。その前に企業で既に 10 年勤めていましたので、私はもう 65 歳になりました。今日の奨励が最後の機会になります。そこで、本日の奨励題は、「終わりに」としました。

ただ今、司会の方に読んでいただいた聖書の箇所はペトロ第一の手紙と言うところからです。これは、ペトロと言う人が、不当な、理不尽な、思いもよらない苦しみや試練を受けている人々を励ますために書き送った手紙です。ペトロはどこでこの手紙を書いたのか。それはこの手紙の最後の方に書かれています。「バビロンにいる」と書かれています。バビロンとは、ローマのことです。ヨーロッパはローマ大帝国の時代、その皇帝にはキリスト教信者を虐殺するネロが在位していました。つまり、苦しみや試練を受けている人々に励ましの手紙を書いているペトロこそ、たぶん捕らえられてローマに引いてこられ、命の危険さえある危機的な立場にあったと予想されるのです。

ペトロは、いつも主イエス・キリストの近くにいた使徒のひとりでした。イエス・キリストには、12 人の弟子がいたことをご存知だと思います。ペトロは其中でもリーダー的存在でした。ところで、ペトロと言う名前は本名ではありません。これはイエス・キリストが初めてペトロと出会ったとき、イエス・キリストがつけたあだ名のようなものです。本当の名前は「ヨハネの子シモン」です。では、「ペトロ」とは、どのような意味なのでしょう。ペトロとは、大きな石、岩と言う意味です。なぜ主イエスはそのようなあだ名をつけたのでしょうか。岩は、大雨が降っても風が吹いても動じることはありません。その場にあって常に堂々としています。ペトロも、岩のように堂々と動じない弟子だったのでしょうか。ペトロはイエス・キリストに 3 年間ほどそばで仕えていましたが、その間のペトロは失敗だらけでした。イエス・キリストと共にいた時は、動じない「岩」とはかけ離れていたように思います。数々の失敗の中でも最も大きな失敗は、イエス・キリストが十字架にかけられる直前にあったことです。間もなく自分は十字架にかかるということをイエス・キリストは知っていました。それを弟子たちに予告したとき、ペトロは言いました。「主よ。どこに行かれるのですか。主よ。なぜ今はついてこられないと言われるのですか。あなたのためならば私は命をも捨てます」。実に勇ましい言葉をペトロはイエスに言ったのです。これに対してイエスの応えは、「私のために命を捨てるというのですか。はっきり言うておきます。今朝、鶏が鳴くまでに、あなたは 3 度私を知らないと言うでしょう」。夜明けまでもう数時間です。そのような短い時間に、今、勇ましいことを言ったペトロが「主イエスを知らない」などと言うだろうか。ペトロはまさか自分がそれほど頼りない、弱

い人間だと思ってもいませんでした。

ペトロは自分に自信があったのです。しかし、結果はイエスが言われた通りになってしまいました。イエスはローマの兵隊に捕らえられ、縛られて、取り調べのため大祭司のところに送られました。ペトロは隠れてその後について行き、大祭司の中庭で様子をうかがっていた時です。その門番の女性に、「あなたもあの人の弟子の一人ではありませんか」と聞かれたのです。たったそれだけです。縛り上げられても、鞭で打たれてもしていません。たったそれだけで3度も「イエスを知らない」と応えてしまったのです。強いと思っていた自分の自信は、たった数時間で崩れてしまいました。

駄目な弟子、信用できない弟子ですね。しかし、その後、よみがえられたイエスは、ペトロに大きな使命を与えたのです。それは、「私の羊を飼いなさい」と言うことでした。あの時にペトロはイエスに言われていました。「あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」。そして、「互いに愛し合いなさい。私があなた方を愛したようにあなた方も互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなた方が私の弟子であることを皆が知るようになる」。だから、ペトロは今、動じることの無い岩となり、不当な、理不尽な、思いもよらない苦しみや試練を受けている人々を励ますのです。

「終わりに」と言って、ペトロは大切な勧めをしました。「皆心を一つにしなさい」。自分勝手にならず、思いを一つにしなさい。「同情しなさい」。今、苦しんでいる人、悲しんでいる人の気持ちを思いやれる心を持ちなさい。「兄弟を愛しなさい」。兄弟とは、肉親だけではありません。一緒にいる仲間を愛しなさい。「憐れみ深くなりなさい」。イエスは山で人々に教えられた時に言われました。「憐れみ深い人々は幸いです。その人たちは憐れみを受けるからです」と。心の優しい人になりなさい。皆に愛すること、憐れみ深くあること、そして、同情できる心を勧めました。更に謙虚でありなさい。若い人も年配者も、教職員も学生も、皆謙虚でありなさい。人は高慢に陥りやすい者です。自慢したくなります。見下すことも良くあります。しかし、あなた方はそうであってはなりません。謙虚な者になりなさい。そして、最後の勧めが難しいのです。「悪に対して悪を返さず、侮辱に対して侮辱を返さず、逆に祝福を祈りなさい」。「自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」、これも主イエスが山で人々に教えられた教えです。十字架にかけられたイエスは神に何と祈られたかご存知ですか。「父よ。彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」と、自分を十字架に付けている人のために贖いの祈りをささげたのです。終わりに、ペトロは主イエスに教えられた大切なことを愛する人々に勧めたのです。

これは、命の危険さえある危機的なペトロが、苦しみの中にある人々に勧めた言葉であります。いかがですか。自分には無理だと思われるかも知れませんが、しかし、自力で行えなくてもイエスの助けがあれば、それによって人が変えられてゆく、これがペトロの体験ではないでしょうか。今、正に、ペトロは動じない岩になっていたのです。聖学院のモットーは「神を仰ぎ、人に仕える」です。私は最高のスクールモットーだと思います。叡智とは大学で学ぶ学問です。叡智を身に付けましょう。しかし、叡智を磨けば、人はそれを誇りたくなります。自慢したくなります。見せびらかせたくなくなります。しかし、聖学院のスクールモットーはそれを持って、謙遜になり、仕える人になりなさい。そして、神と人とを愛しなさいということだと思います。

命は大事です。そこで、私は星野富治さんの詩を思い出しました。星野富治さんは体育の教師で

した。しかし、指導中、事故で鉄棒から落下し、自慢の運動機能を失いました。その星野さんの詩を紹介します。

「いのちが一番大切だと思っていたころ

生きるのが苦しかった。

いのちより大切なものがあると知った日

生きていることが嬉しかった。」

さて、命よりも大切なものとは何でしょうか。それを発見できたら、生きることが嬉しくなるようです。

全ての創り主、父なる神様。聖学院大学の学びの中で、礼拝をささげる時が与えられていることを感謝します。

互いに心をついにしなさい、愛し合いなさい、謙遜になりなさい、許しなさいと教えられました。それは、決して自分の努力でなせるものではありません。どうか主イエスのたすけにより、為せるものとしてください。

一切を委ね、一人一人の祈りと共に主イエス・キリストの御名によりお祈りいたします。

アーメン

2021年12月10日 聖学院大学 全学礼拝